

対論 南アジアにおける歴史展開のダイナミズムを問う

インド中世・近世の 社会変動ダイナミズム

小谷 汪之

1 はじめに

本報告はインド中世・近世史にかかわる以下のような二つの歴史的見通しに立脚している。

①インドにおける中世的世界（中世的な社会構造）の形成は、インド古代諸国家の中心地であった北インド（アーリヤヴァルタ）ではなく、アーリヤ的文化から見れば「辺境」の地である「南方」（ダクシナパタ）、すなわち、タミルナドゥ、カルナータカ、マハーラーシュトラ・デカン、中央インド、オリッサなどの方でより典型的に進行したのではないか。

②インドにおける中世的な社会構造の形成とその動態（中世的世界における社会変動のダイナミズム）を、土地制度あるいは土地所有関係の変化（領主的土地所有あるいは地主的土地所有の形成、等々）という視点から捉えるのは難しいであろう。イギリス植民地支配は、その初期の段階において、地税の徴収を財政的土台としていたから、土地所有関係の調査と土地所有者の確定が何よりも優先された。イギリスで成立した近代的なインド史研究が土地制度史を根幹とするものとなったのはそのため、そのことが独立後のインド人歴史研究者をも土地制度にこだわらせることになったのではないか。それゆえ、インド史の展開を土地制度史にとらわれることなく見直すことが必要である。

このような見通しに立って、インド史における中世的な社会構造とその動態を見ていくと、その特徴は以下の二点に求められる。

①カースト制度に立脚する社会的分業関係の高度で複雑な発達

②村落共同体—地域社会（地域共同体）という重層的な地縁的共同体関係の形成とその強固な存続

この村落共同体—地域社会（地域共同体）という重層的な地縁的共同体関係はカースト制的な社会的分業関係を成り立たせる現実の場であると同時に、その内部に在地の階級的諸収取関係を次々と包摂していく、一つの社会システムであった。このような地縁的共同体関係の原型をなすのは、南インド（タミルナードゥ、カルナータカ）でいち早く形成された「ウールナードゥ」関係であると考えられるが、同様の地縁的共同体関係は、中世を通じて、他の「南方」諸地域でも高度に発達した。

これらの重層的な地縁的共同体関係の編成原理、即ちそこにおける諸権利を表現しているのは、カーニ、カーニヤーッチ、あるいはそれらに代位するミーラース（タミルナードゥ）、アーヤ（カルナータカ）、ヴリッティ（ビルト）あるいは、それに代位するワタン、ミーラース（デカン、中央インド）などといった言葉である。これらはいずれも、ある共同体的な「職」に従事し、それに付随する「取り分」を収取する世襲的な権利、いわば「世襲的家職・家産」を表す言葉である。したがって、これらの言葉を追求することとおして、インドにおける中世社会およびその延長上にある近世社会を貫通する社会変動のダイナミズムを把握することができると思われる。

2 「世襲的家職・家産」

2-1 ワタン vatan

マハーラーシュトラ・デカンや中央インドにおいて、「世襲的家職・家産」を表すのは前述のようにワタン（vatan）という言葉であった。ワタンは、もともとアラビア語で居所、故郷、お国（お里）といったことを意味する言葉であるが、これらの地方では、何らかの「職」（国家の役職ではなく、在地の共同体的な職）に従事し、それに付随する「取り分」を享受する世襲的権利を意味するようになった。

中世・近世マハーラーシュトラ・デカンの在地社会は村落共同体と50

ぐらいの村々からなる地域社会（地域共同体）という重層的な地縁の共同体関係から構成されていた。この在地社会に生きていた人々（その正規の成員）は、いずれも何らかのワタンをもつ者たち（ワタンダール）であった。当時の在地社会はこれらのワタンダールたちが相互に取り結ぶさまざまな社会的諸関係によって構成されていたのである。

ワタンの世襲性はきわめて強かった。例えば、ある村の大工（スタール）が、仕事をめぐって一村民との間に起こった紛争を原因として、村を出た。しかし、数十年後、その子孫が村に帰り、その時村で実際に大工の職に従事していた者（大工ワタンを持たず、村によって一時的に雇用されていた大工。「余所者」[ウパリー] 大工と称された）に対抗して、父祖の大工ワタン（スタールキー）の継承を主張しはじめた。この紛争は長く続いたが、最後には、その子孫の主張が村によって認められた[深沢 1972: 312-314]。

さらに、16～18世紀ともなれば、これらのワタンのかなりの部分は売買可能な物件となっていた。例えば、村長（パーティール）のワタンはパーティールキーと呼ばれたが、税の支払いなどで困窮した村長が自己の村長ワタンを二分して、半分を売却するといったことがよくあった[小谷 1989: 337-339, Elphinstone 1872: Appendix, i-v]。地域社会（地域共同体）の首長であるデーシュムク（郷主）の職もデーシュムキーと呼ばれるワタンで、高額で売買されていた[小谷 1989: 339-341]。

デーシュムクは地域社会（地域共同体）の首長であると同時に、在地の実質的な支配者であり、マラーター王国建国に際して、有力なデーシュムクたちが大きな役割を果たしたことはよく知られている。デーシュムクたちのなかでも、ムドールのゴールバデー家、ファルタンのニンパールカル家、ムヘスワードのマーネー家、マラワディーのガートゲー家などは、すでに14世紀初頭、デカン地方最初のムスリム王朝バフマニー朝（1346-1538年）が建国される過程で、その一つの原動力となっていた[*Sherwani ed. 1973: 207*]。したがって、デーシュムクを頂点とする地域社会（地域共同体）は、遅くとも13世紀までには形成されていたと考えられる。ただし、この地域社会（地域共同体）が、後に見られるようなワタンの原理によって構成されていたかどうかという点については、現時点では、明確なことをいうことはできない。

2-2 ヴリッティ *vr̥tti* (ビルト *birt*)

ワタンという言葉がアラビア語起源であるとするならば、それはムスリム国家権力のデカンへの到来(14世紀初頭)以前にさかのぼることはないであろう。それでは、ワタンという言葉が一般化する前には、ワタンという言葉によって表現されるような権益はまだ形成されていなかったのであろうか。このような疑問をもって史料を読み直してみると、ワタンと併用して、ヴリッティ(*vr̥tti*)という言葉がしばしば使用されていることに気づく。例えば、村長ワタン売買文書で村長ワタンが「ワタン・ヴリッティ」というように表現されているのである[Elphinstone 1872: Appendix, i]。このヴリッティという言葉はサンスクリット語で「職」を意味するので、「世襲的家職・家産」を表現する「土着」の言葉としては極めてふさわしい。したがって、後に一般にワタンと称されるようになる権益は、もともとは、ヴリッティと称されていたと考えられる。

「世襲的家職・家産」が、もともとは、ヴリッティというサンスクリット語で表現されていたということになれば、サンスクリット語の「本場」である北インドに関する史料の中にヴリッティという言葉が出てくるかどうかということが問題となる。それで、北インド中世前期(6-13世紀)が専門の三田昌彦氏に聞いてみたところ、中世前期のサンスクリット語刻文などにはヴリッティという言葉はなかなか見つからないということである。しかし、ハビーブ『ムガル時代インドの農業制度』で言及されている譲与文書(1669年)は、ある村の「ミルキヤト、ザミーナダーリー及びチャウドゥラーイー」が「ビルト(*birt*)の形」で譲与されたということを示している[Habib 1999: 183, n. 65]。このビルトは、明らかに、ヴリッティ(*vr̥tti*)という言葉が転訛したものである[Wilson 1855: 88-89]。このことは、ムガル時代以前から、「世襲的家職・家産」がビルト(ヴリッティ)と称されていたことを推測させる。このビルト(ヴリッティ)という言葉は、北インドでは、19世紀になってもザミーナダーリーとほぼ同義で広範に使用されていた[Baden-Powell 1892: Vol. 1, 131-132]。ビルトという言葉は、ジャジマーニー制度という概念を提起したことでよく知られるワイザー『ヒンドゥー・ジャジマーニー制度』(初版、1936年)にも見られる。ワイザーは、司祭(パンディット)、金工、大工、床屋などの諸カーストの人々は、それぞれ自分の家の世襲的な顧

客 (clientele) をもち、これらの顧客の総体 (換言すれば、職域) が彼にとってのジャジマーニー (jajmani) あるいはビルトを構成する、とのべている [Wiser 1988: xxii]。さらに彼は、このジャジマーニーあるいはビルトが単に世襲的な権利であっただけではなく、譲渡可能な物件であったことについて、大工を例として指摘している [Wiser 1988: xix]。

このように、ムガル時代以前にさかのぼるビルトという言葉が、その本来の語義を留めたまま、20 世紀の北インドに生き続けていたのである。それは、何らかの形態の「世襲的家職・家産体制」が長期にわたって北インド社会の基軸をなしていたことを示唆している、といつてよいであろう。

2-3 カーニ kārṇi (ミラーズ mīrās)

サンスクリット語ヴリッティに対応する言葉が、南インドのいわゆるドラヴィダ系言語世界にも存在するのではないかと考えた時、直ちに念頭に浮ぶのは、18 世紀後半からのイギリス植民地支配下において、広く用いられたミラーズ (mīrās) という言葉である。この言葉はもともとアラビア語で「世襲財産」を意味する言葉がペルシア語を通してインドに入ったもので、さまざまな世襲の権益を表す言葉として、デカンから南インド一帯で広く一般的に用いられた。このミラーズという権益は、もともとのタミル語ではカーニ (kārṇi) あるいはカーニヤーッチ (kāṇiyāṭchi) という言葉で表されていたものである。辛島昇氏によれば、カーニという言葉はチョーラ朝中期、すなわち 11 世紀頃から「土地なり、収獲物なりに対する権利」を表す言葉として用いられるようになったという [辛島昇編 2007: 25]。しかも、バーデン＝ポーエルがのべているように、カーニ (カーニヤーッチ) という言葉はカルナム (村書記) のような村役人の世襲の権益だけでなく、村の番人や村の踊り子の権益など、すべての共同体的な世襲の権益を表わすものであった [Baden-Powell 1892: Vol. 3, 116]。ということは、南インド (タミルナードゥ) では、遅くとも 11 世紀までにはある種の「世襲的家職・家産」が形成されていたということを意味しているとしてよいであろう。そして、このカーニ、カーニヤーッチという言葉で表される諸権益と、それら諸権益の保有者の間に形成される社会諸関係 (「世襲的家職・家産体制」) を成立せしめていた場が、ウールーナードゥ (村落共同体—地域社会) という重

層的な地縁的共同体であったと考えられる。ウールーナードゥ構造はタミル地方の北、デカン高原南部のカルナータカ地方においても、すでにラーシュトラクータ朝時代（8世紀中頃から10世紀後半）に、形成されていた。この、「南方」においていち早く形成されたウールーナードゥ構造にインドにおける中世的社會構造の「原型」を認めることができるのではないだろうか。

3 社会システムとしての「世襲的家職・家産体制」

3-1 カースト制度と「世襲的家職・家産体制」

ワタンから出発して、ヴリッティ（ビルト）、ミーラース、カーニ（カーニヤーッチ）とたどってくると、そこにインドの中世・近世社會を貫通する一つの鮮明な社會像が浮かび上がってくる。それは、さまざまな「職」が「世襲的家職・家産」となっていき、それらの間に取り結ばれる多元的な諸關係が統合されて、一つの社會システム、いわば「世襲的家職・家産体制」を構成していくような社會の像である。

各種の「職」が家職・家産として世襲化していく過程はカースト集団、カースト制度の形成・発展の過程と密接に関連していたと考えられる。北インドの史料では、10世紀頃から、後にカーストと総称されることになる諸集団がジャーティ（jāti）、ジュニヤーティ（jñyāti）などという名称で現われ始める〔三田 2007: 52-53〕。そして、これらの諸カーストが互いに取り結ぶさまざまな關係が次第にカースト制度を形成していくことになる。このカースト制度の形成過程と村落共同体—地域社會（地域共同体）の形成過程とが相互規定的・同時に進行したところに、「世襲的家職・家産体制」が形成されたと考えることができるであろう（インド中世におけるカースト制度の形成については、〔小谷 1996〕）。

限られた社會的資源をもって、できるだけ多くの人々が生活していくためには、社會的資源をできるだけ細かなシェアに分けて、分有していくことが必要である。「世襲的家職・家産体制」はそのために適合的な体制だったのである。しかし、そのことは「世襲的家職・家産体制」が、その内部に不平等な分配關係や階級的収取關係あるいは差別の關係を一切含まない、フラットな社會關係であったなどということを意味しているのでは決してない。だいたい、歴史の現實において、フラットな共同体關係などというものを想定すること自体が無意味である。既にのべ

たように、地域社会（地域共同体）の首長であるデーシュムクは、他面では、在地の実質的な支配者であり、彼らがその「家職」にもとづいて収取する取り分は地域社会の生み出す剰余のうちのかんりの部分を占めていたであろう。規模は小さいとしても、同様のことは村長についてもいえる。「世襲的家職・家産体制」はこのような階級的収取関係を含みながらも、なお安定的な社会的資源分配システムとして機能していたのである。

3-2 「世襲的家職・家産体制」の変質

さまざまな「世襲的家職・家産」から構成されるこの社会システムにおいては、社会的分業関係や商品経済の高度化、それに伴う階級的収取関係の発展などとともに、つねに新たな「世襲的家職・家産」が生み出されていき、「世襲的家職・家産体制」がより複雑に高度化していくというダイナミズムが働いていた。しかし、それは同時に、「世襲的家職・家産体制」がその内部から変質していく過程でもあった。そのことは、遅くとも16世紀までには、世襲的家職・家産の一部、特に実入りの良い「特権的な」世襲的家職・家産が売買可能な物件となっていたことに示されている。前述のように、デカンではデーシュムク・ワタンや村長ワタンなどのワタンの売買がしばしば行われていた。北インドではザミーンダーリーの売買、集積の過程が進行していたし、南インドでも、ミールース（カーニ）の売買が盛んに行われていた〔小谷・三田・水島 2007、水島 2007〕。本来密接不可分であった家職と家産とが分離し、資産としての家産だけが売買されるということは、「世襲的家職・家産体制」にとっては、逸脱的な事態というべきであろう。発展してくる商品経済のなかに「世襲的家職・家産」そのものが「商品」として巻き込まれるにいたったのである。

16世紀以降、西欧諸国の東インド会社などの活動によって遠距離交易が世界的規模で発展したことはこの過程をいっそう促進する要因として機能した。それは社会的資源分配システムとしての「世襲的家職・家産体制」の機能そのものを脅かすような動きであった。世界的な市場経済の発展の中で、「世襲的家職・家産体制」はその内部に自己否定的な要素をますます多く含みこむことになっていったのである。インド史上の近世とされる17・18世紀は、「世襲的家職・家産体制」におけるこ

のような変質が深く進行していた時代ということができであろう。しかし、その過程が「世襲的家職・家産体制」の解体をもたらす前に、インドはイギリス植民地支配下に入り、植民地的近代という全く別の歴史過程をたどることになったのである。

4 おわりに

本報告では、インド史におけるポスト・グプタ期（6・7世紀）から18世紀まで、すなわち、いわゆる中世・近世社会を貫く社会変動のダイナミズムを、土地制度あるいは土地所有関係（領主的土地所有、地主的土地所有etc.）の展開にではなく、「世襲的家職・家産体制」の展開と変質に求める考え方を提起した。

この考え方によれば、カースト制度を基盤とするインド中世・近世の社会的分業関係は、実態としては、「世襲的家職・家産体制」という形をとっていたのであり、階級的収取関係、具体的には、土地生産物（農民的生産物）に対する収取関係も「世襲的家職・家産体制」の内部に包摂されていた。そこでは、土地生産物の多くの部分に対する取り分権が「特権的」な性格を持つワタンやビルトやカーニ、すなわちデカン地方でいえば、郷主ワタンや村長ワタンに配分されることをとおして、郷主・村長層—農民関係といった在地における階級的収取関係が形成されていたのである。したがって、「世襲的家職・家産体制」の展開と変質そのものが歴史のトータルな変動を表示していたということになる。

以上のような観点に立って、改めてインド史の展開過程を大きく見渡してみると、インドにおける中世的社会構造が典型的に形成されたのは、古代アーリヤ文化の中心地というべき北インド（アーリヤヴァルタ）ではなく、アーリヤ文化から見れば「辺境」の地であった「南方」（ダクシナパタ）だったのではないかという着想が湧いてくる。タミル地方において、ウールーナードゥという地域社会の重層的構造がいち早く形成され、カーニと呼ばれる世襲的権利が確立されたことはそのことを示していると考えられる。もしそうだとするならば、残された課題は、インド史上の古代から中世への移行における、このような中心の移動ともいべき現象をどのように理解するかということになるであろう。

参考文献

- Baden-Powell, Baden H., 1892, *The Land Systems of British India*, 3 vols., Clarendon Press.
- Habib, Irfan, 1999, *The Agrarian System of Mughal India*, 2nd revised ed., New Delhi: Oxford University Press.
- Sherwani, H. K., ed., 1973, *History of Medieval Deccan (1295-1724)*, Vol. I, The Government of Andhra Pradesh.
- Wilson, H. H., 1855, *A Glossary of Judicial and Revenue Terms and of Useful Words occurring in Official Documents of the Government of British India*, London.
- Wiser, W. H., 1988, *The Hindu Jajmani System*, 3rd ed., New Delhi: Munshiram Manoharlal (Original ed., Lucknow, 1936).
- 辛島昇、2007、「序章 南インド史の展開と南アジア」、辛島昇（編）『世界歴史大系 南アジア史 3—南インド—』、山川出版社。
- 小谷汪之、1989、『インドの中世社会』、岩波書店。
- 小谷汪之、1996、『不可触民とカースト制度の歴史』、明石書店。
- 小谷汪之・三田昌彦・水島司、2007、「序章 中世的世界から近世・近代へ」、小谷汪之（編）、『世界歴史大系 南アジア史 2—中世・近世—』、山川出版社。
- 深沢宏、1972、『インド社会経済史研究』、東洋経済新報社。
- 水島司、2007、「第6章 植民地支配下の社会 1 在地社会の変化」、辛島昇（編）『世界歴史大系 南アジア史 3—南インド—』、山川出版社。
- 三田昌彦、2007、「第1章 南アジアにおける中世的世界の形成」、小谷汪之（編）『世界歴史大系 南アジア史 2—中世・近世—』、山川出版社。

こたに ひろゆき ●日本学術会議（第一部）会員・東京都立大学名誉教授
(reji@zf6.so-net.ne.jp)